

姫路市総合福祉通園センター「ルネス花北」成人部機関紙

ゆうあいばよい

№176

障害者支援センター
かしのきの里
在宅障害者デイ・サービスルーム
書写障害者デイサービスセンター
広畠障害者デイサービスセンター
障害者やすらぎルーム 障害者体育館
あぼしリサイクル事業所
ぱっそ・あ・ぱっそ

令和4年(2022年)2月21日発行

新しい年を迎え、早いもので2か月が過ぎようとしています。連日新型コロナウイルス感染症についてのニュースが流れ、まだまだ予断を許さない状況が続いています。また、寒さの厳しい時期もあります。皆様体調を崩されませんよう十分に気を付けてお過ごしください。

今月号は、特集での「地域交流事業」の記事に加え、研修報告、各事業所の取り組みの報告等盛りだくさんの内容となっています。是非、ご一読ください。

ゆうあいギャラリー



タイトル

「ボタニカルアート」

障害者支援センター

活動作業グループ

広く活動内容を知っていただくために、利用者の写真を多く掲載しています。
掲載写真は、ご本人の了承を得たうえで使用させていただいている。

花の北福祉まつり担当 平野 潤（障害者支援センター）

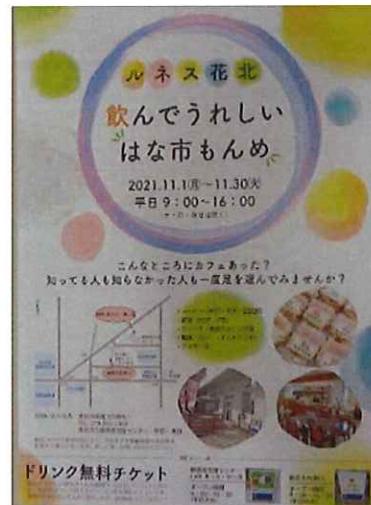
ルネス花北では、地域の秋祭りの日に「花の北福祉まつり」を30年以上に亘って開催しています。地域の自治会や子ども会を招いて屋台を敷地内で練り合わしたり、職員や利用者自治会が飲食等の模擬店を開いたりして地域の方々と交流を図っていました。しかし、平成30年より台風による天候不順や新型コロナウィルス感染拡大の影響のため4年連続で開催できており、今年度も中止せざるを得ませんでした。

今年度は、花の北福祉まつりの目的である、地域との交流や障害児・者への理解を深め、福祉の輪を広げることを繋いでいくために、コロナ禍の今でも出来るイベントはないかと模索し、「飲んでうれしいはな市もんめ」「作ってたのしいはな市もんめ」「はな市もんめスペシャル」の3つのイベントを実施することとしました。

「はな市もんめ」とは、昨年度より障害者支援センターで開催している授産品販売会の名称です。「はな=鼻、市=口、もん=聞、め=目」と、授産品を作る際にも、買う際にも五感を使ってという意味を込めて、そしてそれを売る市場ということで「はな市もんめ」という名称となっています。この名称を拡げていくために、今回の3つのイベントでも使用することにしました。

1つめの「飲んでうれしいはな市もんめ」では例年、花の北福祉まつりに参加していただいている白国、保城、西中島、増位新町、保城横手の各地元自治会にルネス花北の紹介を掲載したチラシを配布しました。チラシには、ルネス花北のことを知ってもらって足を運んでもらうきっかけ作りとして、障害者支援センターが運営している「café あっと・ゆ~る」、「喫茶ふれあい」の2店舗において期間限定（11/1～30）で使用できるドリンク1杯無料券をつけました。

期間中は22名の来店があり、30～80歳代の幅広い年齢層の方にご利用いただきました。チラシを通じて、初めてルネス花北や喫茶店舗のことを知ったという方が半数おられ、周知という意味では一定の効果があったものと考えています。



2つめの「作ってたのしいはな市もんめ」では授産品作製の体験を通じて、障害者支援センターの利用者がどのような仕事をしているのかを知ってもらうことを目的としました。例年、花の北福祉まつりの際にポスター作成を依頼していた増位小学校、水上小学校、砥堀小学校の3校の児童に参加者を募り、11/23に実施しました。体験の種類としては、エコバック、キーホルダー、名刺、クッキー、洗車の5つとし、密を避けるために午前・午後と分けて、一つのプログラムの上限は5人で付添は一人までという条件で募集しました。

最初は利用者も参加し、講師として交流を図ることを企画していましたが、新型コロナウィルスの感染状況等を踏まえ、今回は参加を見送りました。そのため、事前に利用者が行っている作業の様子を写真や動画に撮り、当日参加者に観ていただきました。

応募者は43名で当日参加された児童は41名でした。各プログラムとも笑顔や真剣な表情が見られ、出来上がりを兄弟や友達同士で見せ合う等、終始楽しそうな様子でした。また、障害のあ

る子どもも数名参加されており、将来のイメージづくりになつた方もいた様子でした。

アンケートでは「楽しかった」「次は他のものを作ってみたい」「来年も参加したい」「次は喫茶に行ってみたい」「ルネス花北は知っていましたが、今回の『はな市もんめ』に参加した中で色々な活動を知れたことが良かったです」等、好評な意見ばかりでした。当日出勤した職員からは、「地域の人と話が出来て、楽しい時間が過ごせた」「子どもがとても良い笑顔をしていて新鮮だった」等の感想があり、普段とは一味違う充足感を味わうことが出来ました。また、イベントを通じてルネス花北や障害者支援センターを初めて知った人が3分の1程度いて、障害者支援センターで行っている活動の様子や利用者の方々が普段どのような作業をしているのかを知つてもらえた有意義なイベントであったと考えます。

今後、新型コロナウイルスが収束すれば、利用者が参加して交流を深めるとともに、授産品の販売会やアート作品展との共同実施、喫茶の営業等、付加できそうなプログラムがいくつか考えられ、更なる地域との交流が拡がる可能性が考えられるイベントでした。



3つめの「はな市もんめスペシャル」ではコロナ禍で売上の落ちている授産品を販売する機会を設けるため、兵庫県の地域における共同による授産商品販売促進事業を活用し、近隣のクッキー等のお菓子を作っている事業所との共同販売会を企画しました。参加事業所は「真砂園」「きらら」「書写ひまわりホーム」「若葉福祉作業所」「きやのーら」の5事業所で、11月の毎木曜日に1日2~3の事業所が障害者支援センターのcafé あっと・ゆ~るのテラス席を利用して販売会を実施しました。

販売商品はクッキー・シフォンケーキ・パン等が中心で、利用者やご家族、一般客も何名か来られ、1~2時間で完売する商品もありました。それぞれの事業所の特性が出た商品が並び、事業所間で商品に対する思いやポップ、パッケージデザインの在り方等について情報交換することもでき、お互いに刺激しあえたイベントであったと考えます。今回をきっかけに今後も継続して共同販売会を実施して、売上向上に繋げるとともに地域の方に様々な事業所のことやそこで作っている商品等を知つてもらう機会とし、福祉の輪が広がればと思います。



今回、3つのイベントを通じて地域や他の事業所との交流を図りました。コロナ禍で何も出来ないと諦めるのではなく、今だからこそ出来ることを検討し、「とりあえず、やってみよう!」

という思いで実施しました。細かい部分では色々と反省点もありますが、花の北福祉まつりとは違った地域との交流の可能性が見えてきたことも事実です。次年度以降、どのような形になるか分かりませんが、ルネス花北や障害者支援センターのことを一人でも多くの方に知つてもらい、障害児・者への理解を深めて福祉の輪が広がるようなイベント等を考えていきたいと思います。



事業所・班紹介

～自立訓練班（障害者支援センター）～

訓練グループ サービス管理責任者 堀内泰介

◇はじめに

自立訓練班（自立訓練事業を実施）は、平成 24 年に事業を開始し、開設されてから今年で 9 年になります。定員は 15 名。利用期間は最長 2 年です。

利用される方は、就職を目指す人が中心で、コミュニケーションや仕事に向かう姿勢、自分に対する自信、いわゆる自己肯定感を高めることにニーズがある人が主な対象者になります。

とは言え、自立訓練班ができた平成 24 年から利用された 34 名（現在の在籍者 4 名を含む）の内、終了後就労移行支援事業等を活用し就職された人は 11 名と概ね 3 分の 1 の方になります。残りの 3 分の 2 の方は、自立訓練班の活動を通じて、自分の強みや、自分を活かせる環境の整え方を習得し、就労継続支援 A 型事業所や B 型事業所を進路として選ばれています。

◇自立訓練事業の大切な活動はアセスメントにあり！

自立訓練事業の活動の目的は、社会生活スキルを身につけることと一般的にはいわれていますが、自立訓練事業に取り組んでいる事業所の集まりなどでは「活動の重要な部分はアセスメント（評価）である」といわれています。しかしアセスメントは、単に項目にそって判定する事ではありません。

自立訓練班で行っているアセスメントは活動の色々な場面でその人の様子を見ながら行います。これができるから合格できないから不合格といった内容ではありません。例えば、新しいことを取り組むときに躊躇してしまう要因は何なのか、安心して挑戦するためにはどのような環境があればいいのかを活動を通して見ていきます。

大切なのは、様々な経験を通して、自分自身の力を、利用者ご本人がわかることがあります。もちろんご本人だけでなく、ご家族や今後利用する支援機関、就職先の人などにもお伝えします。それによりご本人が活動しやすい、生きやすい環境を広げることができます。

◇活動内容

活動の内容は多岐にわたります。作業は基本的には 3 ~ 4 種類ですがスポット作業にも対応することで更に種類は増えています。調理実習や縫製、洗濯など生活に根差した活動以外に、運動にも積極的に取り組みます。増位山に登ったり、ウォーキングに行ったり、ラグビーボールを使って簡単なゲームもします。座学と言って学校の教室での勉強のような場面もあります。様々な内容があることも重要ですが、多くの場面を体験していただくことも大切にしています。

◇アセスメントのために。自信をもってもらうために。

活動の特徴は、内容や取り組み方にできるだけ枠や形を設けないようにしていることです。メンバーみなさんとのこれまでの経験の中で、これはこうしないといけないと決められ、そうしないといけないことはわかっているけど、どうしてもできない自分が居て、悔しくて、悲しくて、寂しくなる経験をしてきている人が少なくありません。そういう気持ちが心の中に一つでも重くあると、新しい場面に参加してみよう、新しい人に関わってみよう、何かに挑戦してみようという気持ちにななりません。「どうせできない自分」が心に居座ってしまいます。

枠を設けないことで、できるところから取り組むことができます。できることから取り組めば「成功」を体験できます。

また、私たち支援者からすると、枠を設けないことで、色々なその人の姿を見せてもらいます。普段見せる姿とびっくりするほど違う様子を見ると、どちらが本当の姿なんだろうと思ってしまいます。きっとどちらも本当の姿で、周りの環境や関わり方で、人は様々に変わっていくんだなと思います。プログラムを通じて見せてもらったその人の良いところは、その人の「成長の種」だと思います。一つの種からより多くの花が咲き、実を結ぶことができます。どこで咲くのか？それは一般企業の職場かもしれませんし、福祉サービスを提供する事業所かもしれません。その人がその人らしく、安心して過ごせる場所も一緒に探していくのが自立訓練班です。

◇最後までお読みいただきありがとうございます。これからも私たちをよろしくお願ひいたします。



調理実習

研修報告

令和3年度職員全体研修

『多職種協働を面白がるために～モヤモヤ対話のススメ～』

研修事業担当 小林 大介（障害者支援センター）

兵庫県立大学環境人間学部准教授 竹端寛氏を講師に迎え、上記のテーマでご講演いただきました。今回の研修では、「連携や協働の在り方」を捉え直すために必要な「対話」について深めることができました。

「対話」には、そこにいる人の話を聴き、共に考え合う姿勢の「水平の対話」と、自分事として受け止め、感じることを言葉にしてみる「垂直の対話」があり、連携や協働にはこの2つの対話を重ねることが大切であると話されていました。

しかし、これは“理想”的な「対話」であって、価値観のズレや世代間ギャップでなかなかうまくいかないことが多いのが実状だと思います。当たり障りのない会話だけにならないだろうか、責任の押し付け合いとなるような議論にならないだろうか、相手の話を「聞こえない・気づかない・わかったふり」になってしまわないだろうか。自分自身を振り返った時に、当てはまることが多いように感じました。これでは連携や協働はできません。



竹端先生のお話で、「自分が変わらないと他人も変わらない」という言葉が胸に突き刺さりました。まずはモヤモヤしていることがあれば、言葉にしてみることから始めようと思います。相手から心配事の相談があれば、自分事として受け止め、共に考え合う姿勢を持ち、そしてお互いが学び合い、納得できる形を目指していければと思いました。

また、価値観のズレや世代間ギャップを埋めるには、所属している組織の理念や使命を、しっかりと理解し共有しておくことが大切だと学びました。時代や状況に合わせて理念や使命を見直せる柔軟性も時には必要だと感じました。

最後に、対話することから逃げて「どうせ」「しかたない」と言い訳している自分を恥ずかしく思いました。相手と、同じ目的地を目指し一緒に「旅」をしていくような関係性を一からまた築いていきたいと思います。

厚生労働大臣賞を受賞しました

在宅障害者デイ・サービスルーム

日本肢体不自由児協会主催の「第40回日本肢体不自由児・者の美術展／デジタル写真展」の書の部門において、在宅障害者デイ・サービスルーム利用者の小島芳郎さんの作品が応募総数 210 点の中から最高賞である「厚生労働大臣賞」を受賞されました。

同作品展は 12 月 15 日から 19 日まで東京芸術劇場で開催され、それに先立ち、12 月 15 日に協会の総裁を務めておられる常陸宮殿下のご臨席のもと、開会式及び作品鑑賞会が行われました。作品鑑賞会後には、東京芸術劇場と受賞者をオンラインでつなぎ特賞入賞者の表彰式が開催されました。小島さんも習字教室の藤澤講師と一緒に参加され、ご家族にもお越しいただいて、同室で YouTube 配信を視聴されました。終わった後、小島さんは「とても緊張したけど、表彰してもらえて嬉しかった。これからも頑張りたい」と笑顔を見せておられました。



今回の受賞は、小島芳郎さんが長年にわたって書道に真摯に取り組み、講師の熱心な指導のもと努力を重ねられた結果であると思います。本当におめでとうございます。



『鎮魂』

第34回全国陶器市への出店 30回目を迎えて



かしのきの里
園長 原田 賢哲

令和3年10月30日から5日間、大手前公園で「第34回全国陶器市」が2年ぶりに開催されました。全国30産地の焼き物が一堂に集まるイベントです。昨年度はコロナ禍において中止となりましたが、今回は感染症対策をしながら、かしのきの里の陶芸班も備前焼を販売することができました。テント配置の関係上、電気ろくろの実演を行うスペースが確保できなかったことは悔やまれますが、天候にも恵まれて多くの方に来場していただきました。一時期落ち込んでいた売り上げも販売方法を工夫したことで、ここ10年間では一番よく売れていました。

全国陶器市への出店は、平成4年度から始まりました。今回で30回目を迎えるにあたって、少し振り返ってみたいと思います。当時の記録によると、「きっかけは姫路市からの依頼で、出店料を免除する代わりに電気ろくろの実演を行ってほしいというものでした。全国の窯元と肩を並べることへの戸惑い、人前での実演には不安がありました。ところが、利用者は気軽に実演を受け、人前での練習を積み重ねてから本番にのぞみました」と書かれてありました。

私自身、陶芸班の担当をしていたこともあって、何回も全国陶器市に携わってきました。備前焼の市場価格よりも格安で販売していたので、大盛況の頃のテント内は人で溢れかえり、レジ前の行列が途絶えないという状況もありました。立ちっぱなしで疲れていても、よく売れている時は元気が出ましたが、一方で、あまり売れなかつた時は気持ちが沈んだものです。実演する利用者以外にもテント前での呼び込みや、レジ周辺で手伝いをする利用者など、自分たちが作った陶器が売れていく様子を目の当たりにしながら嬉しそうにしていました。そして、目の肥えた備前焼の愛好家からの高い評価は、自信につながったものです。障害者施設と知って敬遠する人もいれば、まったく関係なしに購入される人もいます。福祉的なバザー感覚で買うには少し高いかもしれません。とはいえ、相場から考えると安すぎるので、人によって値段の感じ方も様々であったように思います。現在は、利用者の加齢とともに陶芸班の規模も縮小し、専任の職員は配置していません。そのような状況ですが、商品陳列のレイアウトやポップの活用など工夫しながら、陶器市では安定した売り上げを維持しています。

「かしのきの里・実法寺窯」の看板を掲げ、電気窯だけではなく、本格的な登り窯などを構える障害者施設は全国的にも珍しいといえます。さらに、西日本で最大級とされる姫路市の全国陶器市に、30年間出店し続けていることを誇りに思います。1年目から参加している利用者は、職員よりも陶器市を熟知しています。長い間、実演で活躍され、昨年5月に退所した利用者も当日は遊びに来てくれました。これまでに多くの利用者の頑張りと関係者のご協力、ご支援があってこそ、陶芸班が継続できていることに感謝いたします。そして、これからも1年1年を大切にしながら、全国陶器市への出店ができるよう願っています。



芸術祭の取り組みについて



毎年文化の日には、イーグレひめじ特別展示室で「ルネス花北芸術祭」を開催しています。「ルネス花北芸術祭」とは、在宅障害者デイ・サービスルーム、書写障害者デイサービスセンター、広畠障害者デイサービスセンター、重度障害者活動支援センターえぶりいの4事業所が共同で実施している作品展です。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の流行により、昨年度に引き続き今年もイーグレひめじでの開催が中止となりました。そこで、代わりとなる催しができないかと考え、成部門内で取り組んだ内容について紹介します。

在宅障害者デイ・サービスルーム

11月15日～19日の5日間、在宅障害者デイ・サービスルームにおいて「ルネスデイ作品展」を開催しました。今年は手芸・ちぎり絵・パソコン・絵画・習字・アートセラピー・フラワーアレンジメントの7種9教室から全部で92点の力作を展示しました。以前のイーグレひめじでの開催とは違ってスペースや観覧者など制限がありました。利用者の方や講師の先生と一緒に工夫しながら展示や飾り付けを行い、とても素敵な会場になりました。観覧者の方々は、皆さん本当に感動されたご様子で、「一人ひとりの個性が表れた素晴らしい作品ばかりだった」「作品を見て心が温かくなりました」等、制作に打ち込んできた利用者の方々にとっても大変嬉しく、また、これから創作意欲をかき立てられる貴重な言葉をいただきました。



書写障害者デイサービスセンター

書写障害者デイサービスセンター（以下、書写デイ）では、事業所内の会議室において11月15日～19日に書写デイ作品展を行いました。今年のテーマは「星に願いを！」。利用者の皆さん、ひとりひとりのイメージを膨らませ自分の星座や好きな物、キャラクターなどをモチーフに職員と協力してコツコツと作り上げてきた自慢の作品を展示しました。イーグレひめじでの芸術祭のように広く市民の皆さんに見ていただいたり、地元自治会集会所に展示して地域の方々に見てもらうことはできませんでしたが、事業所内で利用者の皆さんのが仲間の作品を鑑賞したり、送迎に合わせて見に来られたご家族や、事業所を訪れた担当相談員の方、見学者の方、ボランティアの方等に、より身近に見ていただくことができました。



広畠障害者デイサービスセンター

11月8日～12日に、当事業所のある西保健センター玄関ホールにおいて「広畠デイ芸術祭」を開催しました。利用者ご家族はじめ、西保健センター職員や来館者、関係機関の方、元職員など40名の方が来場され称賛の声をいただきました。今回の個人作品のテーマは「ご当地めぐり」とし、ゆるキャラや有名人、名産物等を製作しました。作るものを見つめていく時にタブレットで検索をしたり、制作を進めながら、ご当地に思いを馳せ、ちょっとした旅気分も味わうことができました。また、11月12日には、書写・広畠障害者デイサービスセンターと重度障害者活動支援センターえぶりいの3事業所でZoom中継し、お互いに作品のお披露目交流会も行いました。芸術祭の作品展示もオンラインの交流会も、今年はコロナ禍でも新たな形として実施できたように思います。



来年度はどのような開催になるかわかりませんが、利用者の方々が一生懸命作り、思いのこもった作品がより多くの方々に見て頂けたら良いなと願うばかりです。

ルネス花北成人部事業所一覧

姫路市立 障害者支援センター（多機能型）

〒670-0804 姫路市保城 309 番地 1

TEL 079-282-2384

FAX 079-224-6751

就労移行支援

就職訓練班

自立訓練

自立訓練班

就労継続支援B型

喫茶班「café ぴあのぴあ～の」「café あっと・ゆ～る」「ふれあい」
製菓班「クッキー工房 檻の詩」・洗車班・作業第一班

生活介護

軽作業班・個別作業班・活動班

姫路市立 かしのきの里（多機能型）

〒671-2246 姫路市打越 1352 番地 6

TEL 079-267-0202

FAX 079-267-0445

就労移行支援

就労移行班

就労定着支援

クリーン作業・陶芸班

生活介護

姫路市立 書写障害者デイサービスセンター

〒671-2203 姫路市書写台二丁目 7 番地 1

TEL 079-267-2636

FAX 079-267-2794

生活介護

姫路市立 広畠障害者デイサービスセンター

〒671-1116 姫路市広畠区正門通三丁目 2 番地 2

TEL 079-239-1888

FAX 079-239-1898

地域活動支援センターⅡ型

姫路市立 在宅障害者デイ・サービスルーム

〒670-0804 姫路市保城 309 番地 1

TEL 079-282-2384

FAX 079-224-6751

障害児・者一時保護施設

姫路市立 障害者やすらぎルーム

〒670-0806 姫路市増位新町二丁目 37 番地

TEL 090-2598-9237

FAX 079-224-3173

体育施設

姫路市立 障害者体育館

〒670-0806 姫路市増位新町二丁目 37 番地

TEL 079-288-7122

FAX 079-224-3173

就労継続支援A型

あぼしリサイクル事業所

〒671-1236 姫路市網干区網干浜 4 番地 1 エコパークあぼし内

TEL 079-273-8889

FAX 079-273-8870

相談支援事業所

ぱっそ・あ・ぱっそ

〒670-0955 姫路市安田三丁目 1 番地 姫路市総合福祉会館 2 階

TEL 079-240-6702

FAX 079-240-6705

ゆうあいだより No.176 令和4年(2022年)2月21日発行

発行 姫路市総合福祉通園センター成人部

編集 「ゆうあいだより」編集係